「あなたの心の声」

～あなたはどう聴いて（聞いて）いますか？～　詩篇 49:1-13

本音と建前

私たちはこの日本で生活している中で本音と建前どちらで生きていることが多いでしょうか。心で思っていることをそのまま出しながら生きているでしょうか。反対に心で思っていることを打ち消して建前で生きていることが多いかもしれません。私たちは生きている中で周りからそのことを自然に学んできたのではないかと思います。私たちは両親、尊敬している人、愛している人からの発言や行動、態度によって大きな影響を受けます。そしてその時にどのような決断をしたのかということが大事なのです。私たちは個性というものを含めて神によって創造されました。しかし私たちは周りと比較して育っている中で劣等感を植え付けられながら成長するようになってしまいました。周りと見比べてできていない部分を見つけては「私はダメだ～」と落ち込んでいくようになるのです。特に性格という部分は遺伝によらずに形成されるといわれています。この性格とは私たちが環境の変化、周りから良い影響も悪い影響でも受けた時に、どのように決断するのかで決められていくのです。（詩篇４９：１～１３）この詩篇の作者であるダビデは自らの罪に対して敏感でありました。また、罪を指摘された時にも、すぐに熱心に悔い改めることができました。それがサウル王との違いと言えます。人は誰でも失敗するものです。失敗しない人は一人もいません。そしてその失敗やネガティブな事が目の前に起きた時に、どのように乗り越えたかがその人の価値に変わります。私たちはすばらしく造られています。しかし今、自分がすばらしいと思っている人はあまり多くはいません。それは劣等感があるからなのです。周りから受けた傷をそのまま蓋をしていた上で、また同じような傷を負わないためにした決断があります。多くは「どうせ私はダメ」「どうせ私は愛されていない」「どうせ私は嫌われている」･･･ということを思い巡らしていきます。そして「あの人とは関わらない」「自分に悪くする人には徹底的に仕返しをしてやろう」などの決断をしてしまうのです。これは本来神さまが造られた姿とは違った姿です。それにも関わらずそれがあたかも自分自身であるかのようになってしまうのです。私たちは本来の人格の上に鎧のように間違った価値観が覆ってしまっているのです。私たちはこの鎧が否定されてしまうとあたかも自分自身が否定されているような錯覚にすら陥ってしまいます。これは神様によって造られた本来の姿に向かって鎧を外すように促しても否定をしたり、受け入れられなかったりしてしまいます。また自分はダメと言い聞かせていると私たちの周りへも同じように悪影響を及ぼしていくようになってしまいます。私たちは心に語りかけてくる声をどのように聞いているでしょうか。そしてそれとも聴いているでしょうか。私たちは耳に門（ガード / フィルター）のようなものを立てながら " きく " のです。私たちを傷つける言葉に対してすぐに閉ざせるように防衛機能が発達してしまっているのです。私たちは心を開いて聴いていれば、相手の真意というものは理解できるように造られているのです。私たちは愛しているので相手がよくなってほしいと願っているからこそ話しをしているのです。愛の反対である無関心であれば、会話は必要ありません。向き合う必要もなくなるのです。それとは反対に私たちの心に語りかけてくる声に対しては素直に聴いています。しかしその声は信仰的なものもあれば、ネガティブで聖書とは違った声もあります。私たちがよく“聴いて”いるのは神様から引き離そうとする声ではないでしょうか。そして信仰的な声に対しては“聞いて”いるのです。受け入れることはしません。これが問題なのです。

ですから今日、この原因となっている劣等感がなくなるようにしていきたいのです。劣等感とは価値観を拒否感や怒り、恥、不安といった痛んだ心の症状によって変化した傷ついた心なのです。変化した時、すなわち決断した時、私たちはどのようにしたのでしょうか。そして一度決断をしてしまうとなかなかそこから抜け出すことができません。なぜなら、脳はできるだけ経験したことのあることをさせるからです。それは経験しているという安心があるからです。それは誰しもが持っているもので自己防衛からくるものです。これが私たちの生きている中で癖として現れるのです。私たちは過去にしたことを再度行うことを繰り返していき、癖になっていくのです。

レジリエンスとは

レジリエンスという言葉が注目されていますがこのレジリエンスという言葉はストレス（外力による歪み）に対して「外力による歪みを跳ね返す力」という意味で使われています。これは私たちが維持、成長するために必要な力なのです。フルートコンテストの演奏中に顔に蝶がとまってしまった人がいました。その人はその蝶によって集中力を切らされることなく、最後まで演奏をやりきりました。これはレジリエンスできた例です。しかしそこであきらめてしまったり、逃げ出してしまったりする可能性もあります。そうなると自暴自棄になって悪い決断をしてしまうのです。１２弟子であったペテロは十字架を前にしてイエスを裏切ってしまいました。しかし復活後のイエスに出会い、悔い改めて良い決断をしました。それは殉教に至る生涯が物語っています。（イザヤ４３：１～８）私たちの耳に門があると、神が私たちを愛しているメッセージが表面上しか受け取ることができないかもしれません。しかし心で聴くことができるのであれば、私たちはストレスがあったとしても悪い決断をすることがなく、正しい決断をすることができます。すなわちレジリエンスすることができるのです。今まで失敗した過去があり、間違った決断があったとしてもイエスキリストによるならば新しくなることができます。

①マイナスをあなたを祝福する種に

過去のマイナスはイエスキリストが直してくださいます。その経験はこれからプラスになる種であることを信じていきましょう。今まではその種は悪い実を結ぶために蒔いていました。しかし今は、良い実を結ぶためにあるのです。種とは決断です。種とは周りから得るものではありません。本来の種は収穫した中からとっておくものです。すなわち、私たちの中からでしか種にならないのです。レジリエンスのようにどのような決断をしているのかが問題です。フルート奏者は蝶をマイナスの種にすることもできましたがプラスの種にしました。今や「動じないフルート奏者」として大活躍しています。このように私たちにあるマイナスであった出来事を主にあって祝福につながる種としましょう。

②「～には敏感　自分には高評価」

今までは自分の罪に対して敏感になることができませんでした。それは劣等感があるからです。自分の罪は認めない上に周りの人の罪は指摘するようなことになります。他人に厳しく、自分に甘いのです。これは劣等感から来るものですから、ほとんどの人が当てはまるのではないかと思います。自分自身のことは愛せなくて嫌いでも自分を守ることをしています。それによって自分の罪には鈍感になっていくのです。「～」は「自分の罪」が入ります。ダビデは自分が失敗した時はすぐに悔い改めていました。このように私たちは自分自身の心がどのようになっているのかを敏感に感じて、すぐに悔い改められるようにしていきましょう。私たちは「ごめんなさい」のプロ集団になりましょう。ごめんなさいをして悔い改めることのできる私たちは価値がある人になれます。

③価値あるものは価値の分かる方に！！

宝石も価値が分かるから意味があるのです。ただのガラス玉と思ってしまっている人は価値が分かっていない人です。ですから私たちがどれだけ価値があるのかについては私たちを造った神様の元へ行かなければ価値を見出すことはできません。「たいせつなきみ」という物語でも同じことを見ることができます。主人公であるパンチネロは造り主であるネロの元へいった時に自分の価値を見出すことができていきました。このように私たちは毎週教会に集まりどのようなことをしているのでしょうか。私たちは隣人に対して神様が造られた時のすばらしい価値を見出し、その元の姿へ戻れるように様々な方法で接しています。私たちはイエスキリストによって価値を見出されたからです。そしてイエスキリストは死に至るまでレジリエンスを全うしました。どんなことがあっても逃げずに使命を全うしていきました。これは私たちが失ってしまったものを取り戻すための神の方法です。私たちは今までしてしまった事を十字架につけて、新しい歩みをしていきましょう。

これからの歩み

そしてその悪い決断の故、悪い実を得てしまっているのであれば、それも十字架につけて新しくなりたいのです。素直に神様の前に出て、過去の失敗は「ごめんなさい」と告白し、過去の傷は「悲しかった」祈っていきましょう。私たちはこれを知らなかった時は悪い決断を重ねていくだけでした。今日、語られた言葉をどのように聴いて or 聞いて進んでいきますか。私たちは自分の中にある劣等感を少しづつ乗り越えていき、新しく歩んでいくことができます。自分の心にある思いを素直にお祈りしていきましょう。

（要約者：平澤　一浩）